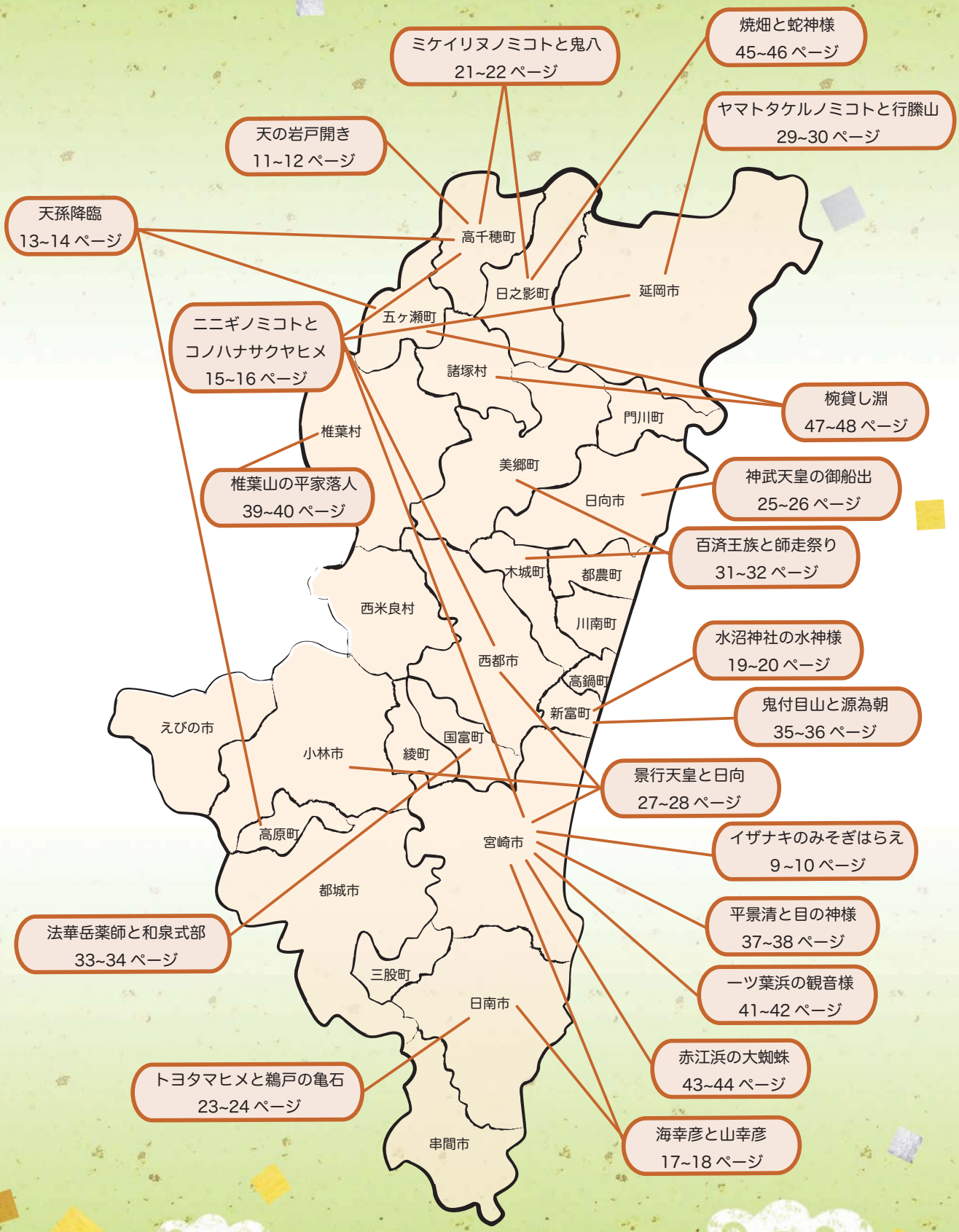
神話・伝承編

神話・伝承に関する宮崎県地図



みやざきの神話・伝承について

今から八十年くらい前の昭和時代の始め頃まで、我が国の農山村や漁村には、たくさんの人々が住んでいました。

山から木を伐出して町に運んだり、田畑を耕して米や麦を作ったり、海で魚や貝を獲って暮らしていたのです。

その頃まで一軒の家族は、父母と子ども、おじいさん、おばあさんを含んで七、八人いました。家族が十人ほどいる家もありました。

そんな村々では、子どもたちは大人から村の神様の話を聞いたり、山や川の伝説を聞いたり、どこからか伝わった昔話を聞くことがありました。

おじいさんや、おばあさんは、そんな話をよく知っていて、子どもたちに聞かせてくれたのです。

古事記という古い書物は、今から千三百年前に作られました。上・中・下の三巻になっていて上巻は、「神代」の話です。ここに書かれている神様の話を「日本神話」と呼んでいます。大昔の人々は、この世界のもとを造ったのは神様であろうと考えていたのです。

日本の神話は、「高天の原」・「出雲の国」「日向の国」が舞台になっています。それで、日向の国が舞台になっている神話を、「日向神話」と呼んでいるのです。「天孫降臨」や「ニニギノミコトとコノハナサクヤヒメ」、「海幸彦・山幸彦」などの話がそれです。

神話の中の神様は必ずどこかの神社に祀られています。神社も神話を伝える大切な場となっています。

さらに神社では、春・夏・秋・冬の祭りに関連して、神楽が舞われたり、御神幸の行列が行われたりしました。家庭でも祭りの料理が作られました。古事記に書かれている神話は、神社のお祭りを通して、私たちの暮らしの中にたくさんの文化を生み出しているということができます。

「天孫降臨」の神話は、古事記と日本書紀という本の中で、日向の「高千穂くしふるたけ」・「くしひの高千穂のたけ」・「くしひの二上のたけ」など幾通りも書かれているので、伝承地が複数あるのです。

おなじ神話でも、「ミケイリヌノミコトと鬼八」のように、古事記の中の神話ではなく、高千穂神社に伝わっている話もあります。このような話は、神社の伝承といいます。（社伝ともいう）

「法華岳薬師と和泉式部」も法華岳薬師寺に伝わる伝承です。このような伝承は、神社や寺院の創建にかかわる由緒（物事の起こり）として語り伝えられています。

また、どこかの山や川、池や沼など、その場所だけについて語られている話があります。「神武天皇の御船出」「焼畑と蛇神様」「鬼付目山と源為朝」の話などです。これらの話は、その土地に住む人たちによって語り伝えられてきたので、伝説とも呼ばれます。伝説はその土地にくっついて語られています。神武天皇は、日向の国から船出して大和地方を治めました。美々津に語り伝えられた伝説です。

野焼きで焼け死んだ蛇神様の話などは、山の村に幾つか伝えられています。昔から、焼畑を作ることがよく行われていたからです。また、昔の家は茅ぶきでした。村では、屋根をふく、よい茅ができるように、茅場となっている山を、村中の人が出て春さきに焼く行事があったのです。これを野焼きと呼んでいました。野焼きで焼け死んだ蛇を見た人たちもいて、蛇神様のような伝説が生まれたと思われます。

子どもが喜んだり怖がったりする話は、大人も好んで伝えようとしたので、同じような伝説があちこちに語り伝えられて、その土地の伝説になっているのです。修行で旅するお坊さん、諸国を回る薬屋さん、四国八十八ケ所参りの旅人などが、どこかで聞いた伝説を遠くまで運んだと考えられています。「和泉式部」の伝説は、全国に五十ケ所もあるといわれています。「椀貸し淵」伝説も全国的にたくさんあるといわれているものです。

この度、私たちの郷土・宮崎県にある神話・伝承・伝説などの主な話を「神話・伝承」として取りまとめ、県立図書館が発行することになりました。いずれも県民が長い間、育くみ伝えてきた大切な言葉の文化です。私たちが祖先からもらった「言葉の宝物」ということができます。

この本を読まれる皆さんは、人々の喜びや悲しみ、ユーモアや思いやりなど、祖先が残した心豊かな宝物に気づくと思います。さらに語り継がれて、この宝物が長く伝わることを願うものです。

監修
甲斐 亮典さん
（宮崎県文化財保護審議会会長）

イザナキのみそぎはらえ

語り
岡田 勝運さん

阿波岐原の美しい松林の中に、睡蓮の花が咲き誇るみそぎ池（御池）があります。ここは遠い昔、浅い海で、イザナキのみそぎ神話の舞台になったところです。

高天原で生まれたイザナキ、イザナミは、この地上に降りてきて結婚しました。夫婦は、日本列島十四の島々を作り、海や山の神など三十五柱の神々を産みました。

しかし、イザナミは、最後に火の神カグツチを産んだ時、大やけどを負って死んでしまいました。そして地の果てにある黄泉の国へと旅立ちました。悲しみのあまりイザナキは、我が子カグツチを切ってしまいました。

どうしても会いたくて黄泉の国を訪ね、妻と再会しました。

「いとしいわが妻よ、私はあなたとまだ国を作り終えていない。だから帰って来ておくれ」

すると、

「残念ながら、あなたの国へ帰れません。私は、もうこの黄泉の国の食べ物を食べてしまいました。でも、せっかくおいで下さったので、黄泉大神に相談してまいります。しばらく待っていてください。その間、私の姿をご覧になってはいけません」

と言われ、姿を隠しました。

イザナキは、待ちきれずに一つ火をともして御殿に入って見ると、妻の身体には、蛆がたかり、ごろごろと鳴って、八種の雷がとりつき、恐ろしい醜女が取り囲んでいました。びっくりしたイザナキが逃げようとした時、妻はむっくりと起き上がり、

「私によくも恥をかかせてくれました」

となげき、醜女や雷神に千五百人の軍勢をつけて追ってきました。逃げる途中、頭のみかずらや櫛の歯を折って投げつけ、十拳の剣を抜き後手に振りまわしました。一目散逃げる途中、黄泉比良坂のふもとでなっていた桃を三つちぎり、待ち受けて投げつけました。すると、不思議にも魔物たちはワーとことごとく逃げていきました。

しかし、イザナミがさらに追ってきましたので、大きな千人がかりの岩でズシンと道をふさぎました。すると、岩の向こうからイザナミが、

「あなたがこんなむごいことをすれば、あなたの国の人々を

【みそぎ池（御池）】
（宮崎市阿波岐原　市民の森公園内）
この話の舞台であると伝えられている。

注① 高天原・・・天つ神が住むとされる場所のこと。「たかまがはら」と読むこともある。

注② 三十五柱・・・柱は神様を数える単位。人間のように、三十五人とは言わない。

注③ 黄泉の国・・・正しくは黄泉国で、死後の世界のことをさす。

注④ 黄泉大神・・・黄泉の国を支配している神様。

一日に千人絞め殺してあげる」
と叫びました。イザナキは負けじと、
「おまえがそんな恐ろしいことをすれば、毎日千五百人の子どもを産んでみせる」
と切り返しました。
妻と別れ、やっと穢らわしい国から逃げ帰ったイザナキは、阿波岐原の陽に輝く流れのよい海で罪、穢れを落とすために、裸になり、身体を清めるみそぎを始めました。その時、穢れた神々は、次々に生まれた清らかな神々によって祓われました。
最後に、左目を洗うとアマテラス、右目を洗うとツクヨミ、鼻を洗うとスサノヲが生まれました。
「私は多くの子を次々に産み、産み続けた果てに、ついに世にも貴い三人の子が生まれた」
とイザナキは大変喜びました。
そして、アマテラスには、ゆらゆらとゆれる美しい首飾りをおかけになり、
「高天原を治めなさい」
ツクヨミには、
「夜の世界を治めなさい」
スサノヲには、
「海原を治めなさい」
と申し付けました。

注⑤ 八種の雷・・・八種類の魔物のこと。
注⑥ 醜女・・・黄泉の国にいる姿のみにくい女の鬼、魔物のこと。
注⑦ みかずら・・・頭につける飾りのこと。
注⑧ 十拳の剣・・・日本神話に登場する剣。
注⑨ 黄泉比良坂・・・黄泉の国の入口。生と死の境の地。
注⑩ 穢らわしい国・・・黄泉の国のこと。古代の人々は黄泉の国を穢れた国と考えていた。
注⑪ 祓う・・・神に祈って、罪や穢れ・災いなどを取り去ること。

天の岩戸開き

語り
斉藤 初実さん

アマテラスは、全世界を明るく照らす太陽の神でした。そのアマテラスには、それはそれは暴れん坊のスサノヲという弟がいたのです。

スサノヲは、ある時こともあろうに、神様の世界である高天原の田んぼや畑のあぜ道を、メチャクチャに壊し、さらに、立派な高天原の御殿の中に、自分の糞や小便をまき散らしたのです。それでも、姉のアマテラスは、いつも弟スサノヲを、やさしくかばっていました。

すると、スサノヲはそれをいいことにもっとひどい事をするようになりました。なんと、馬の首を切り取ってさか剥ぎにし、それをはた織り小屋にドサッと投げ込んだのです。さあ、てんやわんやの大騒ぎになりました。そして不幸にも、一人のはた織り娘が、はた織り機で体を突いて死んでしまったのです。

いくらかわいい弟でも、こんなひどい事は許せません。アマテラスは、悲しくなって、高天原にある天の岩屋という洞窟に入り、岩戸をピタリと閉めてその中に閉じこもってしまいました。

さあ大変。太陽の神アマテラスが隠れてしまったので、全世界が真っ暗になりました。いろいろな悪病がはびこり、たくさんの災害がおこるようになったのです。

そこで、大急ぎで八百万の神といわれるたくさんの神様達が、天の安河原に呼び集められ、アマテラスを連れ出す方法を話し合いました。すると、オモイカネノカミという知恵の神様が言いました。

「まず、アマテラスに夜が明けたと思わせるために、長鳴き鳥を鳴かせましょう。そして、岩屋の前でにぎやかに踊るのです。楽しそうな外の様子を不思議に思ったアマテラスが、岩屋の戸を少し開けた時に、タヂカラヲはその戸をこじ開けて、アマテラスを導き出すのです」

「そりゃ名案だ」

「いいぞ、いいぞ」

みんな大賛成です。

「コケコッコー」

たくさんの長鳴き鳥がいっせいに朝をつげました。いよいよ作戦開始です。

【天岩戸神社（高千穂町大字岩戸）】この話の舞台であると伝えられている。

注① 高天原・・・天つ神が住むとされる場所のこと。「たかまがはら」と読むこともある。

注② 天の岩屋・・・岩でできた洞くつ（ほらあな）。

注③ 八百万・・・とてもたくさんという意味。

注④ 天の安河原・・・神様たちが相談した場所。高千穂町にあるとされる。地名や場所については、その他いろいろな説がある。

踊る神様アメノウズメが、逆さにした桶の上にとび乗って、腰をフリフリ狂ったように踊り始めました。

「トントト、トントト、トントトトン。トントト、トントト、トントトトン」

見ていた神様達は大喜びです。それもそのはず、アメノウズメの着物はずり落ちて、お乳もおへそも丸見えになったものだから、みんなヤンヤの大騒ぎです。

「ウワーッハッハッハッ、こりゃどうじゃ、おへそが見えるぞ、おっぱいも見えるぞ。ワーッハッハッハッ」

天井のわれるような外の騒ぎを不思議に思ったアマテラスは、少しだけ岩戸を開けてみました。

「私がいないので、世の中は真っ暗闇のはずじゃ。なのにあの楽しそうな騒ぎは何だろう」

踊っていたアメノウズメは、それを見てすかさず言いました。

「実は、あなたさまよりもっと立派な神様がおられるのです」

そして、フトダマが大きな八咫鏡注⑤をさしだしました。すると、そこには、光輝く美しい神様が映っていました。アマテラスが、よく見ようとさらに身をのりだしたその時でした。陰にかくれていたタヂカラヲが、岩戸を押しあけ、アマテラスの手をとってぐいっと外に導き出したのです。

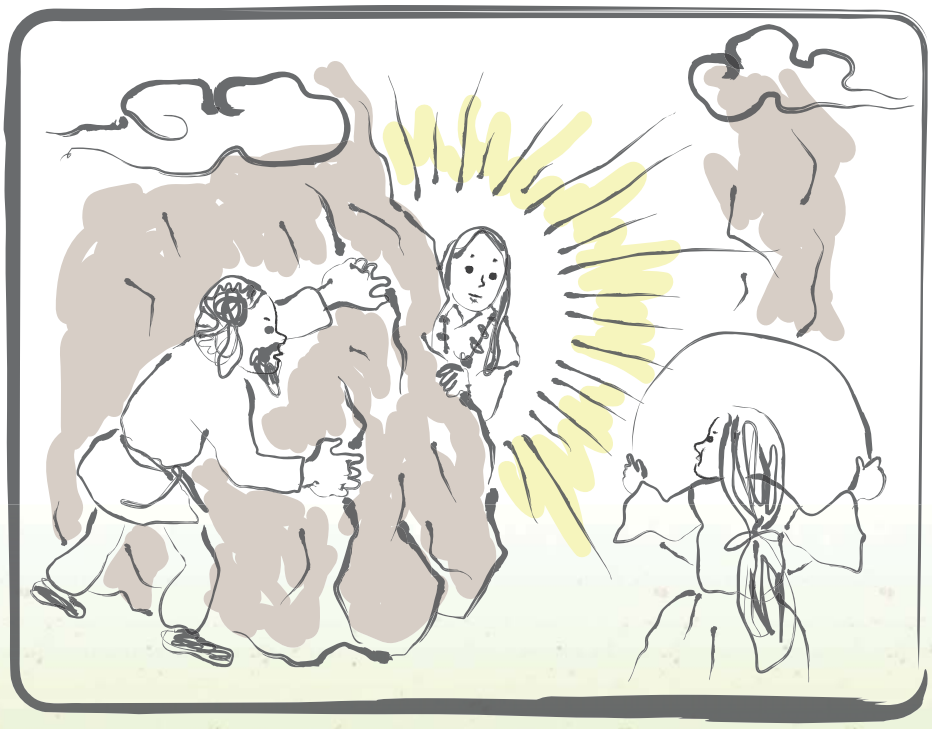
間髪をいれず、フトダマが、手に持ったしめ縄注⑥を、アッと言う間に岩戸に張りめぐらせてしまいました。そして、きっぱりと言ったのです。

「さあ、これでこの岩屋の中へは、もう二度と入る事はできませんっ」

ようやく太陽の神アマテラスを外に連れ出すことができました。八百万の神々は、大喜びです。たくさんの長鳴き鳥も、喜びの声をあげました。

「コ、コ、コ、コッ、コケコッコー」

こうして、世界は、またもとの明るさを取り戻したのです。



注⑤　八咫鏡・・・イシコリドメという神様が作ったとされている鏡。

注⑥　しめ縄・・・この出来事が正月に飾る注連縄の誕生となった。

天孫降臨

語り
宇都 裕子さん

筑紫注①の日向注②の橘の小門の阿波岐原注③で、イザナキの左の眼から生まれたアマテラスは、太陽の神様で天上の世界を治めていました。

ある日のこと、アマテラスはアメノオシホミミを呼んで言いました。

「ようやく葦原の中津国注④を治める時がきました。前に話したとおり、あなたがそこに降りて、国を治めるのです」

するとアメノオシホミミは、

「しかしながら母上、私は息子のニニギノミコトに下界注⑤を治めさせたいと思っています。私の代わりにこの子を降ろすのがよろしいかと思います」

そこで、アマテラスはニニギノミコトを呼び寄せ、

「もくもくとたなびくこの雲の下には、稲穂が豊かに実る美しい国があります。そこは、天つ神注⑥のあなたが治める国です。これからそこへ降りて、しっかりと国を治めてきなさい」

「はい。これからすぐに降ります」

ニニギノミコトは、早速、準備を始め、いよいよ天降ろうとした時です。その途中に光り輝く神が立ちはだかっていました。背の高さは見上げるほど高く、口の端は明るく光り、目はとてつもなく大きく、ほおずきのようにぎらぎら赤く光っていました。

アマテラスはアメノウズメを呼び、怪しい神の正体を確かめるように命じました。アメノウズメは、その神のところへ行き、

「この道は、高天原注⑦の神の子が下界にお降りになる道だ。その前に立ちはだかるとは、そなたはいったい、何者なのか」

「はい。私はサルタヒコと申します。天つ神の御子が、葦原の中津国に降りられると聞いたので、道案内を務めようと思い、お出迎えに参ったのです」

これを聞いたアマテラスは安心し、別れの時、ニニギノミコトに『八咫鏡』という神々しい鏡、スサノヲが大蛇の尾から見つけた『草薙剣』、美しい首飾りの『八尺瓊勾玉』という三つの宝物注⑧を与えました。最後に稲穂を渡し、

「この高天原の稲を葦原の中津国に持ち降り、そこに住む人々の食物としなさい」

と言いました。

【ニニギノミコトの像】
（高千穂町国見ヶ丘）
ニ上山に降臨したと伝えられている。

注① 筑紫・・・九州北部（現在の福岡県）。または、九州全体とする説もある。

注② 日向・・・宮崎県の旧名称であるとされる。

注③ 橘の小門（小戸）の阿波岐原・・・宮崎市内の地名のもとになっている。

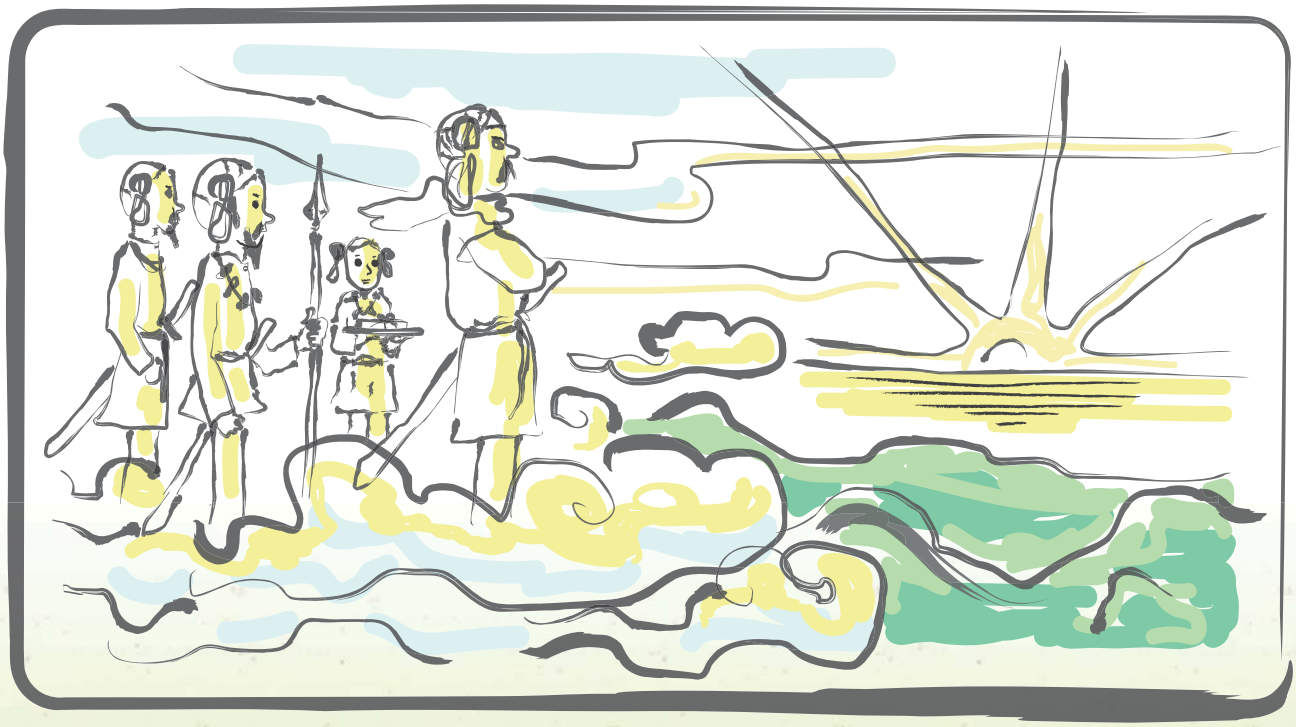
注④ 葦原の中津国・・・人間が住む世界のこと。天つ神の住む高天原（天上界）に対して、下界。

こうして、ニニギノミコトは大勢のお供を従え、サルタヒコの案内で、幾重にも重なる雲をおしわけて、堂々と葦原の中津国へと旅立っていきました。

その途中、天の浮橋に立ち寄ると、地上の世界を見下ろし、これから降り立つ場所をしっかりと確かめました。そして、きりりとそびえたつ九州の日向にある高千穂の山に一息に降り立ちました。ちょうど、静かな海に火をつけたように、朝日が昇ってくる時でした。

「あの朝日はアマテラス様の御心を示していると思わないか。アマテラス様はきっとここに都を定めよとおっしゃっているのだ。ごらん。朝日が、東から真っ直ぐにさしこんでいる。他と比べようがないほど、とても素晴らしいところだ」

こうして、ニニギノミコトは、「朝日の直刺す国、夕日の日照る国」を都に定めて高天原にも届くほどの立派な宮殿を建てて、そこに住むことになりました。こうして天つ神の御子は地上の大地に降り立ち、葦原の中津国を治める時代がいよいよ始まりました。



注⑤　下界・・・ここでは葦原の中津国のこと。

注⑥　天つ神・・・天上の世界を治める神々のこと。高天原に住む、もしくは高天原から降りてきた神々のこと。それに対し、地（葦原の中津国）に現れた神々のことを国つ神という。後に登場するサルタヒコは国つ神である。

注⑦　高天原・・・天つ神の住んでいる場所のこと。「たかまがはら」と読むこともある。

注⑧　三つの宝物・・・三種の神器のこと。八咫鏡はイシコリドメが、八尺瓊勾玉はタマノオヤが、天の岩戸開きの際に作ったとされる。草薙剣（別名：天叢雲剣）はヤマタノオロチの尾からスサノヲが見つけたとされる。

注⑨　天の浮橋・・・天（高天原）と地（葦原の中津国）をつなぐものとされる。

ニニギノミコトとコノハナサクヤヒメ

語り
吉村 敏博さん

ある日、ニニギノミコトが、笠沙の岬[注①]というところを歩いていた時のことです。それはそれは美しい姫に出会いました。ニニギノミコトはひと目でその娘に恋をしてしまいました。

「あなたは誰の娘さんですか」

「私は山の神オオヤマツミの娘で、コノハナサクヤヒメと申します」

「あなたに姉妹はいらっしゃいますか」

「はい。姉が一人おりまして、イワナガヒメと申します」

名前のとおりに、まるで花が咲いたように美しいコノハナサクヤヒメに、ニニギノミコトはすぐに結婚を申し込みました。

するとコノハナサクヤヒメは、

「私から今すぐお返事をするわけにはまいりません。一度家に帰って父のオオヤマツミに相談いたします。そのあと父がお答えするでしょう」

と自分の家へ帰って行きました。ニニギノミコトはさっそくオオヤマツミのもとに使いの者を送り、コノハナサクヤヒメと結婚したい気持ちを伝えました。

ニニギノミコトは何と言っても天つ神の御子で立派な若者です。そんな若者が娘のコノハナサクヤヒメと結婚したいと言ってきたのですからオオヤマツミは大喜びです。山ほどの贈り物をコノハナサクヤヒメに持たせ、姉のイワナガヒメも一緒にニニギノミコトのもとに嫁がせました。

しかし、姉のイワナガヒメは岩のような顔だったので、ニニギノミコトはひと目見るなりこわくなって、とうとうイワナガヒメをオオヤマツミの元へ返してしまいました。

イワナガヒメが返されたことに驚いたオオヤマツミは、ニニギノミコトに使いの者を出して、恨みごとを言いました。

「私が二人の娘を嫁がせたのには意味があるのです。イワナガヒメを妻にすれば、お生まれになったニニギノミコトのご子孫は岩のようにビクともしない永遠の命を持つことができたでしょう。また、コノハナサクヤヒメを妻にすれば、ご子孫が桜の花の咲きほこるようにお栄えになったでしょう。しかしながら、イワナガヒメだけ返したことで、ニニギノミコトのご子孫の命は、いつの日か花のようにはかなく散ってしまうことでしょう[注②]」

こうしたことがありましたが、ニニギノミコトとコノハナサクヤヒメは、めでたく結婚しました。そして「八尋殿[注③]」と

【木花神社】（宮崎市大字熊野）

コノハナサクヤヒメとニニギノミコトをまつっている。木花は「コノハナ（木の花）」に由来していると伝えられている。

いう大きな御殿で、初めて二人だけの時間を過ごしました。しかし、夫婦としてともに過ごすことができたのはこの一夜だけでした。

夜が明けると、ニニギノミコトは反乱をくり返す人々を倒すための旅へと出かけてしまったのです。

それから時が過ぎ、戦いに勝ったニニギノミコトが帰ってきました。この時、コノハナサクヤヒメのお腹の中には、ニニギノミコトとの間にできた赤ちゃんがいました。

「あなたが無事に戻ってきたことと、あなたの子どもを授かったことは、言葉にできないほどうれしく思います」

久しぶりに再会したニニギノミコトにコノハナサクヤヒメは言いました。しかし、ニニギノミコトから返ってきた言葉は意外なものでした。

「コノハナサクヤヒメ、あなたはたった一夜一緒にいただけで子どもができたと言いますが、そんなはずはない。その子は私の子ではなくて、きっと他の国つ神[注④]の子だろう」

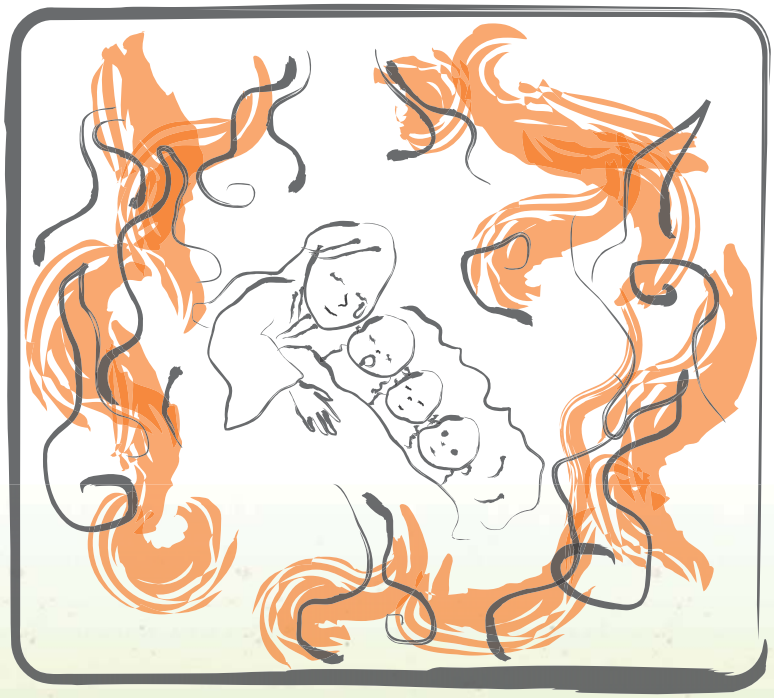
愛するニニギノミコトから疑われたコノハナサクヤヒメは、とても悲しくてたまりませんでした。

「私はこれからお産の準備をします。もしあなたが言うとおり、生まれてくる子どもが他の国つ神の子であるなら無事に生まれてはこないでしょう。しかし、あなたの子であるなら、たとえ火の中でもきっと無事に生まれてくることでしょう」

こう告げると、コノハナサクヤヒメは大きな産屋[注⑤]をつくらせ、中へ入ると、まわりを土で塗りふさいでこもってしまいました。

そして、今まさに出産という時、コノハナサクヤヒメは産屋に自ら火を放ったのです。燃えさかる火の中で三人の男の子が生まれました。

三人の名は、火が燃えさかる時に最初に生まれた子がホデリ（火照）。次に、火の勢いがより強くなった時に生まれた子がホスセリ（火須勢理）。最後に、火がおとろえてきた時に生まれた子どもがホオリ（火遠理）です。後に、ホデリは海幸彦、ホオリは山幸彦と呼ばれるようになりました。



注① 笠沙の岬・・・延岡市の愛宕山が笠沙の岬だったとの説がある。その他にも様々な説がある。

注② イワナガヒメを返したことから、「寿命」ができたと言われている。

注③ 八尋・・・非常に広いこと。八尋殿はとても広い宮殿・御殿をさす。

注④ 国つ神・・・葦原の中津国に現れた神々のこと。それに対して、高天原に生まれた神々を天つ神という。

注⑤ 産屋・・・出産のために別に建てられた小屋。

海幸彦と山幸彦

語り
原田 俊子さん

高天原から天降ったニニギノミコトとコノハナサクヤヒメとの間には、海幸彦と山幸彦が生まれました。

兄の海幸彦は、毎日、海で漁をして暮らしていました。弟の山幸彦は、毎日、山で獲物を獲って暮らしていました。

ある日、山幸彦は、海幸彦に言いました。

「いつも同じ狩りでは、おもしろくない。一度、道具を取り替えて、違う獲物を取ってみよう」

海幸彦はあまり気が進みませんでしたが、山幸彦がしきりに頼むので、やってみることにしました。

二人は使い慣れない道具を手にして、一日を過ごしましたが、二人とも獲物を取ることができませんでした。その上、山幸彦は大事な釣り針を魚に取られてしまいました。

山幸彦は海幸彦に言いました。

「兄さんの大事な釣り針をなくしてしまいました。私の剣で千本の釣り針を作ってお返しします」

海幸彦は怒って言いました。

「あの釣り針は、私の大事な釣り針だ。他の釣り針を何本作ろうとだめだ。あの釣り針を探し出して返せ」

山幸彦は困ってしまい、海岸にしょんぼり立ちすくんでいました。そこへ物知りの老人シオツチノ神がやってきました。山幸彦の話を聞いて、

「海神国に注①行って探してもらいなさい。私が行かせてあげます。海神国に着いたら美しい宮殿があります。その入り口でお待ちなさい」

と教えました。

シオツチノ神は、海神国に行く舟を作って山幸彦を乗せました。山幸彦が舟に乗ると、舟はいつの間にか海神国に着きました。シオツチノ神に教えられた通り、大きな海の宮殿の注②入り口で待っていると、ワタツミノ神の娘トヨタマヒメに会うことができました。トヨタマヒメは山幸彦の訪問を喜び、宮殿に案内してもてなしました。

海神国のもてなしを受けているうちに、山幸彦はトヨタマヒメと夫婦になり、釣り針のことなど忘れてしまい、毎日楽しく暮らしていました。

たちまち、三年の月日がたってしまいました。

ある日、山幸彦は釣り針を探しに来ていることを思い出し

【青島神社】（宮崎市青島）
山幸彦が海神国から帰ってきたときに迎えるために造られたとされている。山幸彦、トヨタマ、シオツチが祀られている。現在も残る裸まつりは、山幸彦を衣服も着ず、村人

て、急に心配になりました。トヨタマヒメが山幸彦の心配そうな顔を見て、訳をたずねました。山幸彦が釣り針のことを話すと、トヨタマヒメは父のワタツミノ神に釣り針を探すことを頼みました。

ワタツミノ神はすぐに海中の魚たちを集めて、釣り針をのどにかけている大きな鯛を見つけ出し、釣り針を取ってやりました。山幸彦は大変喜びました。そして釣り針を持って、国へ帰ることにしました。

ワタツミノ神は山幸彦に二つの宝の玉を持たせました。潮みつ玉と潮ひる玉注③でした。潮みつ玉を振ると潮が満ち、潮ひる玉を振ると潮が引くという不思議な宝物でした。

山幸彦はワタツミノ神が呼び寄せた大きな鮫に乗り、宝の玉を持って、その日のうちに国へ帰りました。そして、海幸彦に釣り針を返しました。釣り針を海幸彦に返す時、山幸彦はワタツミノ神が教えた呪文をそっと唱えました。

「この釣り針はぼんやりする釣り針、貧しくなる釣り針、愚かになる釣り針」

それ以後、海幸彦は次第に貧しくなり、山幸彦はだんだん豊かになりました。

海幸彦は山幸彦をねたんで次第に荒々しい心になり、仲が悪くなってしまいました。そして山幸彦の土地を攻めてくるようになりました。

海幸彦が攻めてくると、山幸彦は潮みつ玉を使って満潮にしました。海幸彦がおぼれて降参すると、今度は潮ひる玉を使って助けてあげました。

とうとう海幸彦は、

「私が間違っていた。これからは、山幸彦の護り人になって国つくりを手助けしよう」

と言いました。山幸彦の国は落ち着いたよい国になりました。

山幸彦とトヨタマヒメとシオツチノ神は青島神社に、海幸彦は潮嶽神社に祀られています。

たちが急いで迎えたことに由来している。

注① 海神国・・・ワタツミノ神が住むという場所。

注② 大きな海の宮殿・・・ワタツミノ神が住む宮殿。いわゆる竜宮城である。

注③ 潮みつ玉・・・塩満珠とも表す。満潮をおこす力のある不思議な珠。

注④ 潮ひる玉・・・塩乾珠とも表す。干潮をおこす力のある不思議な珠。

水沼神社の水神様

日本の人々は、昔から田んぼで稲を作って生活してきました。田んぼに必要な水を溜めておく池や水をひく用水路を、村人は大切に守ってきました。溜め池には、どこでも「ミズハノメノ神」という神様が祀られています。

イザナミは、カグツチノ神を産む時、大やけどをして亡くなってしまいますが、その時、イザナミの尿から生じた神様がミズハノメノ神です。

この神様は、いつの頃からか水を治める神様になりました。水沼池のほとりには水沼神社があって、ミズハノメノ神が祀られています。

昔、この神社の後方に、南北に長さ二キロメートルほども広がる池がありました。周囲には美しい松林が生い茂り、昼でも暗いほどでした。

この近くに太郎兵衛というお百姓さんがいました。早く妻を亡くしましたので、娘と二人で寂しく暮らしていました。娘は父の暮らしをよく手助けして、美しく成長していきました。

ある日のこと、この娘の姿が急に見えなくなりました。太郎兵衛は、泣きながら娘の名を呼んで付近を探しました。松林の中をあちこちと探しましたが、どこにもいません。もしや池に落ちたのではと思い、池の周りで名を呼びながら探し続けました。

すると池の水面が突然ゆれ動き、髪をふり乱した娘の姿が現れ、太郎兵衛の姿を見ると、そのまま水底に姿を消しました。太郎兵衛は、驚いて息をのみましたが、なおも我が子の名前を呼び続けました。

しばらくすると、再び水面がゆれ動きました。そして大蛇の姿が現れました。娘は水神の姿になっていたのです。太郎兵衛は、我が子が水神の子であったことを知りましたが、たいそう悲しんで「今日より我が子を見ず」と嘆きました。

そのことが起こって、村人はさらに池を大切にしましたが、いつの頃からか、この池は「子見ずの池」というようになり、今日では「湖水ケ池」と呼ばれています。

我が国では、昔から水神は、大蛇か竜の姿をしていると考えられてきました。溜め池を大切に守る気持ちが、このような伝説を生んだと思われます。

天正十五（一五八七）年、豊臣秀吉が九州を統一すると、

【湖水ケ池】（児湯郡新富町日置）

ミズハノメノ神がまつられており、「水難除け」や「農耕」の神様として古くから親しまれている水沼神社の裏にある池。この話の舞台となっている。

注① 豊臣秀吉・・・戦国時代を代表する武将。

注② 筑前秋月・・・現在の福岡県朝倉市。

秋月種長という武将が高鍋城主となり、この地方を治めることになりました。秋月氏は筑前秋月の領主[注②]でした。高鍋を治めることになると、前住地から蓮の根を取り寄せ、水沼池に植えさせました。

やがてこの池には蓮が茂り、白く美しい花を一面に咲かせるだけでなく、質のよい蓮根がたくさんとれるようになりました。この池の蓮根は、節も長く柔らかで大変味がよいと言われています。

水神は今も池の底にいて、水を守っているのかもしれません。

ミケイリヌノミコトと鬼八

高千穂神社には、独自の神話が伝えられています。

鵜戸の岩屋で生まれたウガヤフキアエズノミコトとお妃のタマヨリヒメの間には、四人の御子が生まれました。イツセノミコト・イナヒノミコト・ミケヌノミコト・ワカミケヌノミコトです。

末子のワカミケヌが、王位を継ぎ、兄達とともに東遷（日向国から東にうつること）して、後に大和地方を治めて第一代の神武天皇になりました。注①

東遷の時、ミケヌは高千穂から五ケ瀬川を下って、ワカミケヌに合同しました。注②

（高千穂神社の伝承では、ミケヌノミコトをミケイリヌノミコトと呼んでいる）

ミケイリヌが東遷に出られると、その留守に乗じて、高千穂地方にいた鬼八という魔性の者が、思いのままに振舞い始めました。それでミケイリヌは、鬼八を討つために途中から高千穂に引き返しました。

鬼八は魔力を使って大雨を降らせ、ミケイリヌの帰途を邪魔しました。この時、大雨が止んで太陽の影が見えてきたところを、後に日之影と呼ぶようになったと伝えています。注③

ミケイリヌが高千穂に帰り着くと、人々は大変喜んで七日七夜の神楽を催して迎えました。ミケイリヌはあらぎの里という所に宮殿を置きました。

その頃、高千穂の祖母岳明神の娘にウノメヒメという美しい姫がいましたが、鬼八がこの姫を奪って、鬼ケ岩屋という所にかくまっていました。ある時、ミケイリヌが御塩井というところを歩いていると、水面に美しい姫の姿が映っていました。いぶかって訳を聞くと、姫は、注④

「鬼八にさらわれました。どうか助けてください」

と頼みました。

ミケイリヌは田部左大臣・富高右大臣ら四十四人の軍勢を連れて、鬼八退治に向かいました。鬼八は魔力を使って姿を隠しては、高千穂の山から山へと逃げるので、容易に退治することができません。一つの洞穴に隠れているところを攻めると、別の洞穴から抜け出しては逃げ廻ります。諸塚の太白山から米良山へ、さらに肥後の阿蘇山へと追いかける戦いになりました。

【ミケイリヌノミコトの彫刻像】
（高千穂町・高千穂神社内）
高千穂神社の回廊にこの話のミケイリヌノミコトが鬼八を退治する彫刻像がある。

注① 大和地方・・・現在の大阪府と奈良県の一部を指す。

注② 合同する・・・一つにまとまる、統一するの意味。

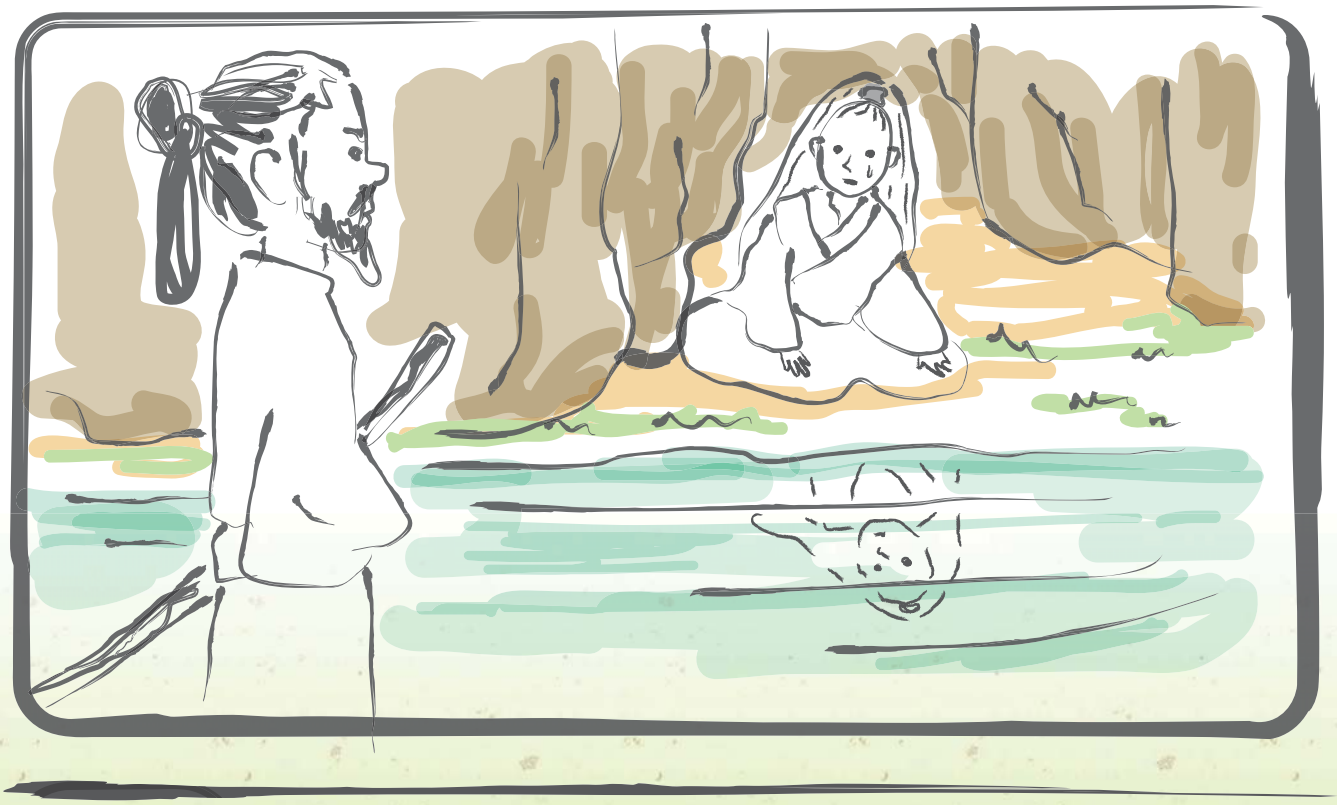
しかしミケイリヌが、神馬[注5]を駆使して追いつめ、左大臣・右大臣が鬼八に組みついたところを、剣を振るって切り殺しました。

鬼八は一度埋められましたが、一晩のうちに生き返るので、身体を三つ切り分けて埋めました。さすがの鬼八も生き返ることができませんでした。そのため、高千穂地方には鬼八の墓が三ケ所伝えられています。

ミケイリヌは、ウノメヒメを助け出してお妃に迎えました。お妃との間に八人のお子が生まれました。そして、ミケイリヌの子孫が代々高千穂地方を治めました。

後年、鬼八の霊は時々目を覚まして地下で唸り声をあげ、高千穂の里に霜を降らせて里人を困らせましたので、高千穂神社では、霜の害を防ぐために「ししかけ祭り」[注7]というお祭りをするようになりました。

高千穂神社は、ミケイリヌノミコトとウノメヒメ、八人のお子の十柱の神を祀っているので、「十社大明神」とも呼ばれています。



注③　太陽の影・・・雲におおわれて太陽の形がはっきり分かる様子を表していると思われる。

注④　いぶかる・・・あやしむ。うたがう。変だと思う。不審に思う。

注⑤　神馬・・・神が乗るとされる馬のこと。

注⑥　組みつく・・・相手のからだに手足をからませる。

注⑦　ししかけ祭り・・・神社の社殿にイノシシを供えて、鬼八の霊をなぐさめる慰霊祭。むかしは、イノシシではなく、人がいけにえとして供えられていたと伝えられている。

トヨタマヒメと鵜戸の亀石

ホオリノミコト（山幸彦またはヒコホホデミノミコトともよぶ）が、海神国から帰ると、間もなくトヨタマヒメが大きな亀に乗って後を追ってきました。そしてホオリに向かって言いました。

「私は出産が近くなりました。天つ神であるあなたの子を生むので、早く産屋を用意してください」

ホオリは急いで鵜戸の岩屋に産屋をたてることにしました。軽い鵜の羽で屋根を覆うことにしましたが、まだ屋根ができあがらないうちに御子が生まれたので、この子にはウガヤフキアエズノミコトという名前が付けられました。

トヨタマは産屋に入る時、ホオリに向かい、

「私は海神国の者の姿になってお産をします。どうか私の姿を見ないでください」

と言いました。ホオリは承諾しました。

しかし、お産が始まるとホオリはトヨタマの言葉が気になって、その姿を見たくなりました。ホオリはトヨタマに気付かれないように、そっとのぞき見てしまいました。

トヨタマは大きなワニの姿になって身をくねらせていました。ホオリは一目見て恐ろしくなり、逃げ出してしまいました。

産屋から出てきたトヨタマは大変怒ってホオリに、

「私は恥ずかしい姿を見られてしまいました。もうこの国にいることはできません」

と言うと、さっと海に入り、海神国の入り口を閉ざして帰国してしまいました。

トヨタマを海神国から運んできたあの大亀は、鵜戸の岩屋の海岸に伏せて、じっと待っていましたが、トヨタマが怒って一人で帰ってしまったことに気付きませんでした。

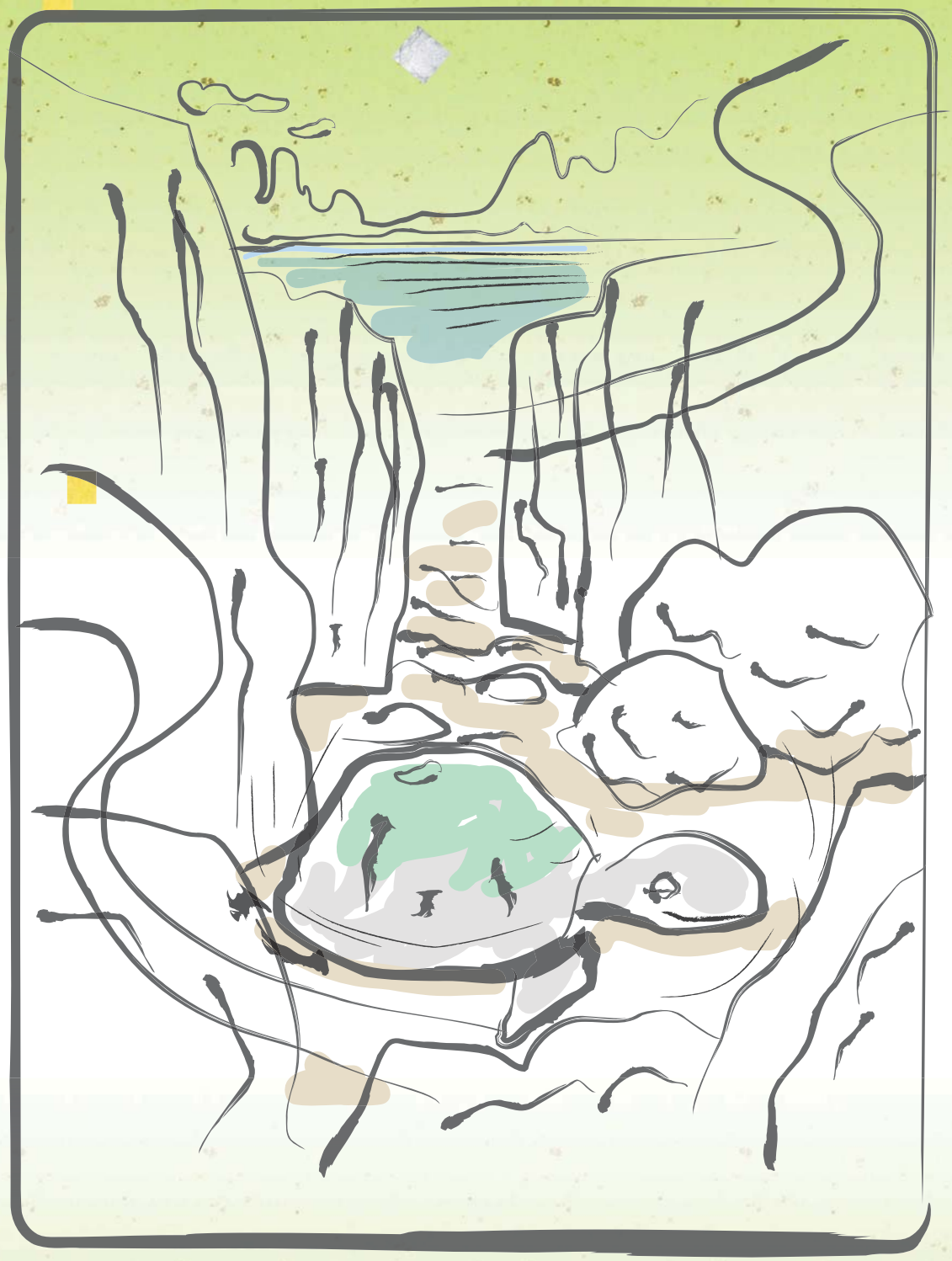
忠実な亀は、トヨタマが来るのをいつまでも待ち続けました。

何百年も何千年も待ち続けました。そしてとうとう岩になってしまいました。岩になるまで主人を待ち続けた亀に人々は気付かなかったのです。

鵜戸神宮に参詣する人は、今でも岩屋の海岸に大きな亀の姿をした岩をみることができます。人々はこの岩を亀石と呼んで、その背中のくぼみに運玉を投げ入れています。

【鵜戸神宮】（日南市）
主にウガヤフキアエズノミコトを祭神として祀っている。運玉を投げ入れることで有名な亀石は、トヨタマヒメが海神国から乗ってきた亀が岩となったものと伝えられる。

主人を見失った亀は、岩になって現代の人々に幸運を与えようとしているのです。
鵜戸神宮で語られるようになった伝説です。



注① 天つ神・・・天上の世界を治める神々のこと。高天原に住む、もしくは高天原から降りてきた神々のこと。
注② 産屋・・・出産のために別に建てた小屋。
注③ 岩屋・・・岩でできた洞窟。ほらあな。
注④ ワニ…ここではサメのこと。
注⑤ 運玉・・・昔はお金を投げていたが、昭和二十九年から鵜戸小学校で作った素焼きのものが使われている。

神武天皇の御船出

鵜戸の岩屋でウガヤフキアエズノミコトの御子として生れたワカミケヌノミコトは、四人兄弟の末っ子でしたが、優れた王子であったので、日向国を率いる王になりました。四十五歳になった時、（広く天下を治めるには、東方のよい土地に行くのがよい）と思いました。それで、一族と軍船を率いて日向を発ち、大和に向かうことになりました。伝説では、美々津からお船出をされたと伝えられています。

一行が美々津に向かう途中、尾鈴山の麓にある滝の水辺で休憩し、矢じりを研ぎました。それで、そこの滝を後に「矢研ぎの滝」と呼ぶようになりました。

美々津では多くの軍船が用意されて、船出の時を待っていました。

ワカミケヌの衣の裾が旅の途中でほころびていました。出発の時が近づいていたので、立っておられるままでお側の者が縫い合わせました。それで、お船出の場所は「立縫いの里」と呼ばれるようになりました。美々津の人々は、お船出に備えて出港の時、団子を作って差し上げようと準備をしていました。ところが、夜明け前に天候が変わり、風向きがよくなったので、出港を早めることになりました。港の人々は、大急ぎで村中の者を起こして準備にかからなければならなくなり、家々を駆けまわって、

「起きよ、起きよ」

と起こしてまわりました。

団子は、あんこと生地を用意していましたが、あんこを丸めて入れるのが間にあわず、あんこと生地をつき混ぜて丸めました。後にこの団子は「つき入れ団子」と呼ばれるようになりました。

船団が美々津を出港して細島の沖まで来た時、また風向きが悪くなったので、細島の港に入ってしばらく様子を見ることになりました。ちょうどその時、細島の湾内には大きな鯨が迷い込んで暴れており、土地の人々が大変困っていました。ワカミケヌは船をだして、大きな鉾でこの鯨を退治しました。やがて出港する時がきたので、この鉾を港の海岸に立てて行きました。後に、この海岸は「御鉾が浦」と呼ばれるようになりました。また、港の一帯は鉾島と呼んでいましたが、いつの頃からか細島というようになりました。

【立磐神社の腰掛岩】（日向市美々津）
お船出の際に神武天皇が、この岩に腰を下ろして待っていたと伝えられている。

注① 大和・・・現在の奈良県。当時の日本の中心地。
注② 美々津・・・日向市にある地名。
注③ 尾鈴山・・・標高千四百五メートル。都農町と木城町にまたがる。
注④ 矢研ぎの滝・・・落差七十三メートル。日本滝百選の一つ。
注⑤ 筑紫・・・現在の福岡県の一部を指す。

ワカミケヌは、六年後に大和地方を治めて日本の第一代の天皇の位につきました。そして神武天皇と呼ばれることになりました。

神武天皇のことが書かれた古事記ができたのは、千三百年前の奈良時代の始めで西暦七一二年のことです。古事記には、日向出発のことは、「即ち日向より発ちて筑紫に」注⑤向かったと書いてあるだけです。

しかし、郷土の人たちは、日向から船団を率いて発つとすれば、たくさんの人と木材を集めて船を造り、物を用意するのに都合のよい場所が美々津であったと考えました。耳川の上流は今も木材の大産地です。

このように、古事記に書かれている神話は、長い間に人々に語られて、地方に多くの伝説を産みました。

※神武天皇・・・古事記ではカムヤマトイワレヒコと記されているが、日本書紀ではワカミケヌノミコトとも記されている。生誕地は鵜戸（日南市）、狭野（高原町）、佐土原（宮崎市）、高千穂町の四ヶ所が伝えられている。宮崎神宮の御祭神として祀られている。

景行天皇と日向

景行天皇は第十二代の天皇です。

古代の日本が一つにまとまる頃、南九州に住んでいる人たちは、熊襲と呼ばれていました。熊襲たちは、なかなか天皇に従わなかったので、景行天皇は熊襲を従わせるため、九州に遠征して日向の国の高屋の宮というところに六年間滞在しました。その時、天皇は日向の国の御髪姫をお妃にしました。

天皇はある時、朝早く児湯の県[注①]にお出になりましたが、朝日が射すのを見て、

「この国は真直ぐに日の出る方に向いている」

と言われました。それで国の名を「日向」と呼ぶようになりました。

六年間の日向滞在を終えた天皇は、やがて都に帰られることになりました。高屋の宮を発って夷守[注②]に向かわれました。途中岩瀬川の近くまで来ると、大勢の人々が集まっているのが見えました。天皇が使を出して様子を調べると、諸県君泉媛が、天皇の御一行をもてなすために集まっていることがわかりました。天皇は喜んでもてなしを受けました。

天皇は、ここから山を越えて熊県[注③]に向かいました。

熊県には兄熊と弟熊という兄弟がいました。天皇は使をやって兄弟を呼び寄せました。兄熊はすぐに天皇のもとに来ましたが、弟熊は出て来ませんでした。天皇は弟熊が従おうとしないことを知り、軍勢を出して従わせました。

一行は、葦北[注④]という所から沖の小島に渡って泊ることにしました。島に住む小左という者を呼んで、

「冷たい水がほしい」

と頼みました。小左は早速、島の水場からきれいな水を運んで差し上げました。このことから、島の名を「水島[注⑤]」と呼ぶようになりました。

葦北から船で八代の海を進んで行きましたが、日が暮れたため暗くなり、岸辺がわからなくなって困っていました。すると遠方に火が見えてきました。天皇は、

「火に向かって船を進めよ」

と言いました。こうして船は無事に着くことができました。

天皇は村人に、

「ここは何という村か」

【高屋神社】（西都市都於郡）
景行天皇が六年間滞在したとされる。近くの黒貫寺にも同じ話が伝わっている。

注① 県・・・現在の県と同じような意味。

注② 夷守・・・現在の小林市細野
夷守。熊襲に対する守備隊がとどまった場所。

注③ 熊県・・・現在の熊本県と考えられる。

注④ 葦北・・・現在の熊本県葦北郡。

注⑤ 水島・・・熊本県八代市植柳下町・水島町に位置する、球磨川

と尋ねました。村人は、
「八代県の豊村です」
と答えました。天皇はまた、
「遠くから火が見えたが、誰の火であったか」
と尋ねました。村人は、
「分かりません」
と答えました。
このことから、後にこの火のことを「不知火」と呼び、その海は不知火海と呼ばれるようになりました。また国の名も「火の国」というようになりました。
このような話は、奈良時代の初めにできた「日本書紀」という書物に書かれています。九州には、景行天皇に関係のある地名が数多く伝えられています。

河口近くにある無人島のこと。

ヤマトタケルノミコトと行縢山

景行天皇の皇子ヤマトタケルノミコト[注①]は、古代の日本建国の時期に、父に代って各地に遠征しました。

ミコトが、熊襲を従わせるために九州に下ってきた時、船を延岡の東海というところに着けて、上陸しました。東海からは、西の方に高い行縢山がそびえているのが見えました。ミコトはその山に向かって進みました。

すでに日は暮れかかっていました。ミコトは、明るいうちに麓の村にたどり着こうと思って道を急ぎました。そして、心の中で一心に陽が沈まないように念じました。この念力が通じたのか、ミコトが麓につくまで、夕陽は沈まずに照らしていました。

行縢山には、川上タケル[注②]という悪者がいて、村人からたくさんの貢物を取り上げて暮らしていました。村人はミコトが来られたのを知って大変喜びました。それで早速もてなしの舞を舞って歓迎しました。後に、その場所を舞野[注③]と呼ぶようになりました。

ミコトは、川上タケルが酒盛りをすると聞いて、その席に紛れこんでタケルを討とうと考えました。それで村人の助けを借りて美しい少女に変装し、お酒を注いでまわりました。ほの暗い焚火の光の中で、ミコトの姿はとても美しく見えました。

タケルは上機嫌で酒を注がせ、そのうち酔っぱらってしまいました。ミコトはその隙にタケルに迫り、隠し持っていた刀で、タケルを討ち果たしました。

村人は、長年苦しめられたタケルが討たれたので、大いに喜びました。ミコトはオウスノミコトという名前でしたが、川上タケルを討ったので、ヤマトタケルノミコトと呼んで讃えられるようになりました。

ミコトが村に留まっておられる時、住んでおられた場所は、武野という地名で呼ばれるようになりました。（武はタケルという意味です）また、ミコトは舞野から眺める行縢山の姿が、乗馬の時に着ける向縢という着衣に似ているので、行縢山と名付けられたと伝えられています。

行縢山は雄岳と雌岳という二つの峰から成りたっていて、二つの峰の間にできたくぼみからは、高さ約八十メートルの滝が流れ落ちています。遠くから眺めると形が矢筈（矢を弓

【行縢神社（延岡市行縢）】
この話の舞台となった場所に建てられ、ヤマトタケルノミコトやイザナキ、イザナミを祀っている。

注① 皇子・・・「おうじ」とも読む。天皇の男の子どものこと。

注② 川上タケル・・・熊襲の族長だと伝えられている。

注③ 舞野・・・現在も延岡市舞野町として名前が残っている。

注④ 矢筈の滝・・・「行縢の滝」の別名。布引の滝とも呼ばれ、日本の滝百選に選ばれている。滝の落差は七十七メートル。

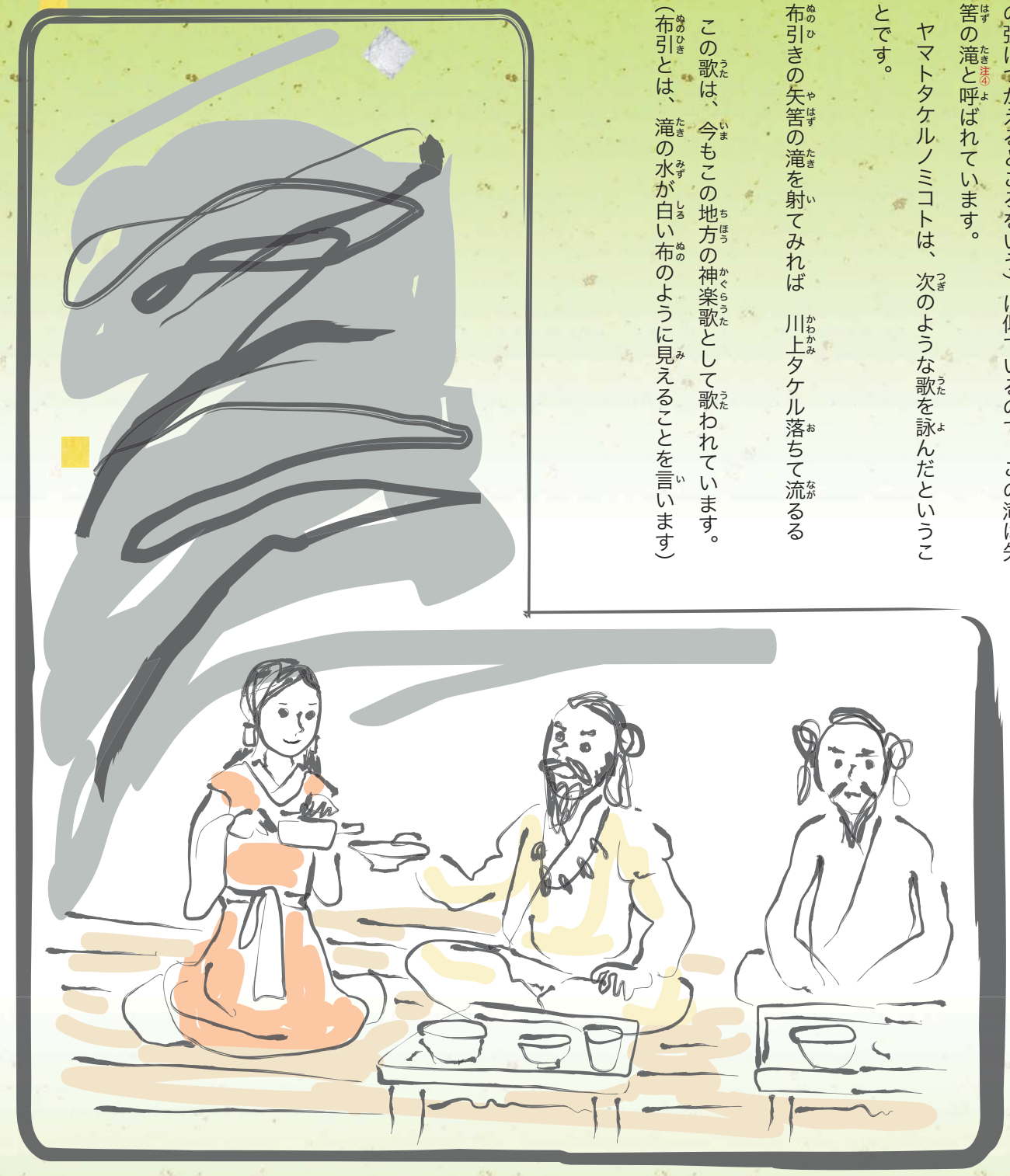
の弦につがえるところをいう）に似ているので、この滝は矢筈の滝と呼ばれています。

ヤマトタケルノミコトは、次のような歌を詠んだということです。

布引きの矢筈の滝を射てみれば　川上タケル落ちて流るる

この歌は、今もこの地方の神楽歌として歌われています。

（布引とは、滝の水が白い布のように見えることを言います）



百済王族と師走祭り

昔、朝鮮半島に百済[注①]という国がありました。

ある時、国内に動乱が起こって、王とその一族は二隻の船に乗り、日本に逃れて来ました。船は筑紫（九州）を目指していましたが、瀬戸内海に入り安芸国[注②]の宮島に着きました。しかし、追っ手が来るのを恐れて、ここから筑紫に向かうことになりました。

一隻には禎嘉王の一行が乗り、もう一隻には王の子福知王の一行が乗っていました。

二隻の船は途中暴風に遭って離れ離れになってしまいました。暴風の中を何とか陸地に向かうことができましたが、禎嘉王の船は日向市の金ケ浜にたどり着き、福知王が乗った船は、高鍋町の蚊口浜に流れ着きました。

禎嘉王が向かうべき土地を占ったところ、

「西の方によい土地がある」

と分かったので、西に向かって進みました。やがて一行は、南郷の神門に着き、そこに落ち着きました。

蚊口浜に着いた福知王も向かうべきところを占ったところ、

「西の方によい土地がある」

という結果が出たので西に向かい、木城町の比木に着いて、その地に落ち着きました。

禎嘉王の一行が神門で安心して暮らせると思っているところに、追討軍がやってくるという知らせがありました。禎嘉王は直ちに一族と従者たちを連れて迎え討ち、南郷と東郷の境の伊佐賀付近[注③]で激しい戦いが展開されました。第二王子の華智王はここで戦死し、禎嘉王自身も流れ矢に当たって亡くなりました。王に仕えていた女官たちも、禎嘉王が亡くなると、悲しみのあまり後を追って自害する者が出ました。

比木にいた福知王は、知らせを聞いて直ちに援軍を率い、小丸川に沿って神門に向かい、父王の戦いを助けました。王族軍は苦しい戦いを続けましたが、土地の豪族どん太郎という人が、食料や武器を出して応援してくれたので、追討軍を追い払うことができました。

戦死した禎嘉王と従者たちを葬ったところは、今も塚原と呼ばれて大切にされています。また激戦地・伊佐賀の土は、流れた血の色で今でも赤いと伝えられています。

神門神社には、もとからの神様であるオオヤマツミノカミ

【百済王の像】（美郷町南郷区鬼神野）

注① 百済・・・古代の朝鮮半島南西部にあった国家。

（コノハナサクヤヒメの父）とともに禎嘉王が祀られています。

比木神社にはオオナムチノミコト（オオクニヌシノミコト）とともに福知王が祀られています。

この二つの神社は九十キロメートルも離れていますが、昔から合同で「師走祭り」というお祭りを続けています。

また、神門神社には百済王族が持っていたと伝えられる三十三面の古い銅鏡が保存されており、県指定文化財となっています。現在は神社の隣にある「西の正倉院」に展示されています。

（三十三面の中で最古のものは、四世紀末から五世紀のものとされています）

注②　安芸国・・・現在の広島県。

注③　伊佐賀・・・「磐境」「岩境」で、岩で示された境界のある場所（日本古典大辞典）とある。その場所で亡くなった王たちを大明神として祀っている。

※伊佐賀の境迎え・・・伊佐賀山峠の伊佐賀神社（現在は東郷町下三ケ中水流集落に近い地に移された）の比木神社側一行を神門神社側が出迎える神事。

法華岳薬師と和泉式部

法華岳薬師寺は、薬師如来[注①]を本尊仏とする寺院[注②]で、国富町にあるお寺です。平安時代に建てられた有名な比叡山延暦寺も薬師如来を本尊仏に祀っています。薬師如来は、病気を除き心身を安楽にしてくれる仏様として、古くから信仰されていました。

この寺の伝えによると、養老二年（七一八年）の八月八日、山の上に美しい雲がたなびき、天上界から何ともいえない心地よい音楽が聞こえてきました。

里の人々は不思議なこともあるものと思っていましたが、どこからか一人の立派なお坊さんがやって来て、山上に寺を建立し、釈迦如来と薬師如来を安置しました。村人は、その山を釈迦岳（八百三十メートル）と呼ぶようになりました。

その後、伝教大師（最澄）という高僧[注③]が、九州を巡回して修行するためにやって来て、この山に立ち寄りました。そして薬師如来を現在の法華岳に移しました。釈迦岳では山が険しいので、村人がお参りしやすいように低い所に移したのです。

平安時代の中ごろ、京の都で朝廷に仕える貴族の娘に、和泉式部[注④]という美しい女性がいました。式部は短歌も上手で、女流歌人としてもよく名を知られていました。

ところがある時、病にかかり全身にかさぶたができて、どうしても治りません。仕方がないので、京都の清水の観音様にこもって、一心に、

「病気を治したまえ」

と祈願をしました。すると夢の中に観音様が現れて、

「日本の三大薬師に参って祈願せよ」

というお告げがありました。式部は、越後の国（新潟県）三河の国（愛知県）と回って日向の国の法華岳に来ました。そして薬師寺にこもり、一心に仏様に祈願しました。昼夜の別なく祈り続けましたが、いっこうに験[注⑤]があらわれません。

式部はついに絶望して、この世に生きる希望を無くし、寺の外に出て裏山の崖に行きました。そして、そこから身を投げました。すると不思議なことに、どこからか老人が現れて式部の手をとり、

「村雨はただひと時のことぞかし　己が蓑笠そこに脱ぎ置け[注⑥]」

と言うと、どこかへ姿を消しました。

式部ははっと我にかえって我が身をよく見ると、かさぶた

【薬師寺】（国富町深年）

七一八（養老二）年に釈迦岳の山頂に金峯山長喜院として建てられたのが創建とされる。

平安時代に入り伝教大師（最澄）がここを訪れた折り、薬師如来のみ中腹の法華岳に移して本堂を建立したと伝えられている。

越後（新潟県）の米山薬師堂、三河（愛知県）の鳳来寺薬師とともに日本三薬師の一つに数えられる。

注①　薬師如来・・・その名の通り医薬を司る仏で、医王という別名もあり、衆生の病気を治し、安楽を与える仏とされる。

はきれいに落ちて、もとの体になっていました。

式部は、薬師如来に感謝の勤めをするため薬師寺にこもり、さらに修行をして都に帰りました。式部は琵琶注⑦を愛用していましたので、その琵琶を法華岳に奉納しました。しかし、今はもうその琵琶を見ることはできません。

注② 本尊仏・・・寺院などで、礼拝の対象として安置される、最も主要な仏のこと。

注③ 高僧・・・仏法に通じた徳の高い僧。位の高い僧。

注④ 和泉式部・・・平安時代中期の歌人である。中古三十六歌仙、女房三十六歌仙の一人。

注⑤ 験・・・きき目

注⑥ 歌の意味・・・「にわか雨はほんの少しの間のことだから、あなたのみのかさをそこにぬぎなさい」※蓑笠と身の瘡をかけたもの。瘡とはかさぶたのこと。

注⑦ 琵琶・・・古代において四弦のものと五弦のものがあった。五弦のものは伝承が途絶え、使われなくなった。弦楽器の一つ。

鬼付目山と源為朝

新富町の中心地は、富田という町です。この町の東側に鬼付目山と呼ばれる山があります。

この山には、観音様の石像がたくさん祀ってあり、土地では観音山とも呼ばれています。

（観音様は三十三の姿をしているので三十三観音と呼ばれています）

山の高さは、約五十七メートル、見晴らしがよくて、海の方に向かって灯台があります。

宮崎平野を広く見渡し、その向こうに日向灘を眺めることができますが、東側は、崖になっていて岩屋がありま[注①]す。

大昔は崖の下まで海が迫っていました。

昔、この岩屋には鬼の夫婦が住んでいました。

鬼は時々田畑に降りてきて、農作物を荒らしたり、女、子どもをさらったりするので、村人は恐れて暮らしていました。

ある時、都から九州にやってきた源為朝という武士が、このことを聞いて、鬼を退治してやろうと思い、日向国にやってきました。

為朝は並はずれて強い弓を引く武士として、人々にその名を知られていました。彼は遠くから山を眺めて、東側から舟で山に近づき、岩屋の鬼を弓で射てやろうと思いました。

風の無いよい天気の日を待って、為朝は岩屋の見えるところまで、舟でやってきました。

そして自慢の強弓[注②]に矢をつがえて、鬼のいる岩屋を狙って、ひょうと矢を射ました。

矢はあやまたず[注③]岩屋の中にいる男鬼の目に命中しました。

夫婦の鬼は驚いて岩屋から飛び出し、大急ぎで何処かへ逃げ去りました。

その後、鬼が再び現れることはありませんでした。

村人は為朝の手柄をたたえて、山を鬼付目山と呼ぶようになりました。

為朝という武士は、一一五六年の保元の乱[注④]という争いに登場します。為朝は幼少の時から身体も大きく、気性が荒かったので、青年になると父の源為義[注⑤]が（この子を都に置いては騒ぎを起こす）と思って、九州に追いやった武士といわれています。

為朝は九州に住むようになると、すぐに大勢の手下を集め、

【富田八幡神社】（新富町富田）
この話に出てくる源為朝にゆかりのある神社として知られている。

注① 岩屋…岩でできたどうくつ。ほらあな。

注② 強弓…張りが強く、引くのに力のいる弓のこと。

注③ あやまたず…ねらったとおりに

注④ 保元の乱…平安時代末期の保元元年（一一五六年）七月に皇位継承問題や摂関家の内紛により朝廷が後白河天皇方と崇徳上皇方に分裂し、争った権力闘争。

各地の武士たちを従わせて、九州を治めたと伝えられています。

為朝の剛勇さを伝える話は、九州のあちこちにあって、沖縄県の島にも伝わっているということです。大分県には、為朝が休憩した時、大弓を枝にかけて休んだと伝えられる弓掛けの松とよばれる松の木があるそうです。

注⑤　源為義・・・鎌倉幕府の初代将軍源頼朝の祖父である。

注⑥　剛勇・・・人並みはずれて、強く勇気があること。

平景清と目の神様

日本史上でよく知られた源平の争いは、一一八〇年から始まり、一一八五年に終わりました。各地の源氏を中心とした武士団が、平氏を倒そうと戦いを始めました。

この争いは、数多くの物語を生みだし「平家物語」注①として、今日まで語り継がれています。平家物語に出てくる剛勇の注②武士に平景清がいます。景清は屋島の合戦で源氏の武士と戦い、その名を知られました。

平氏は、壇ノ浦（現在の下関付近）の戦いで、源氏に敗れ全滅しました。

この時、平景清は生き残って、源氏の大将源頼朝を討とうと思い、戦場から姿をくらまして逃れました。

景清は、山伏の注③姿になって京都の近くに隠れ住み、機会を待っていました。

建久六（一一九五）年に、将軍になった源頼朝が、奈良の東大寺に来ることが分かりました。景清は、この機会に頼朝を討とうと思い、頼朝の行列を見る人々に紛れこんで、付け狙いました。しかし、かえって怪しまれ捕えられてしまいました。

頼朝は景清の剛勇を惜しんで、

「時代は変わったのだ。私に仕えよ」

と言いましたが、景清はどうしても承諾しませんでした。

頼朝は、殺すには惜しい人物だと思って、日向の国に住むようにさせました。

景清は、現在の宮崎市の下北方の地に住み、滅亡した平氏一族の霊を供養して注④暮らしていましたが、源氏が日々栄えていく姿を見るのを我慢できませんでした。

それである時、

「源氏の世などもう見たくない」

と言って、自分の両眼をえぐり取って、盲目になってしまいました。

伝説では、景清は両眼を投げ捨てたので、その眼球は遠く飛び、川向うの神社の境内にある松の木の梢にかかったといわれています。景清の目の霊力は、神の力となりました。この神社は後に生目神社と呼ばれるようになり、目の神様としても祀られることになりました。

景清には、京の都に人丸という注⑤一人の娘がいました。父が

【景清廟】（宮崎市下北方）

注① 平家物語・・・鎌倉時代に成立したと思われる、平家の栄華と没落を描いた軍記物語である。

注② 剛勇・・・人並みはずれて、強く勇気があること。

注③ 山伏・・・山の中をひたすら歩き、修行をする修験道の行者。「修験者」とも言う。

日向の国で寂しく暮らしていることを知り、人丸ははるばると父の住む日向の国までやってきました。

盲目の父の世話をして、孝養を尽くしましたが、父に先だって二十七歳で亡くなってしまいました。

その後、景清は霧島山の参拝に出かけましたが、帰る途中、病気になって亡くなりました。

人々は景清を惜しんで、下北方に景清廟を建て、今も手厚く供養しています。人丸のお墓もこの地に立てられています。

景清の伝説は長く語られたので、宮崎以外の土地にも残っています。

注④　供養・・・死者の霊に供え物などをして、その冥福を祈ること。

注⑤　京の都・・・現在の京都市。当時の日本の中心。

注⑥　孝養・・・親に孝行を尽くすこと

注⑦　廟・・・死者、特に先祖の霊を祀る所

椎葉山の平家落人

歴史上有名な源平の争いは、壇ノ浦の合戦で平氏が全滅して終わりました。

しかし、戦いに敗れた平家一門の中には、戦場から逃れて西日本の各地に隠れ住んだという伝承が残っています。

壇ノ浦から逃れた一団は、九州の北部に上陸し、山中に隠れながら阿蘇山から日向の椎葉山へとたどり着きました。もうこれ以上山深く入ることはできません。

彼らは、山村の人々の助けを借りながら、ここに落ち着いて生活しはじめました。

前から住んでいる人たちに、蕎麦や稗の栽培を習い、材木を集めて家の作り方を教わりながら、椎葉山のあちこちに、小さな集落をつくって住んだと思われます。

一方、勝利した源氏は、源頼朝が将軍となり、鎌倉に幕府を建てて全国を治めるようになりました。

何年かが過ぎていきました。平家の生き残りの人々が、日向の国の椎葉山にいることが、鎌倉の頼朝にも知られました。幕府は、源平合戦の時、弓の名人として名を知られていた那須与一宗高の弟、那須大八郎宗久に、椎葉山の平家の残党を討つように命じました。

宗久は軍勢を率いて九州に降り、肥後の国（熊本県）の阿蘇山を経て日向の国境の山中に入りました。山が険しくなって馬では進めなくなったので、馬を置いて行くことになりました。馬を置いたところを後に、「鞍岡」と呼ぶようになりました。一行は山道をよじ登り、山の奥深く入って、平家の落人たちが住んでいるというところに着きました。

陣所を作りましたが、屋根を覆うものが無いので、葉の茂った椎の木の枝を用いました。このことから椎葉という名前が起こったと伝えられています。

宗久が山に入って見ると、平家の残党といわれる人たちは、山中のあちこちに住んで細々と農業をして暮らしていました。とても戦をするような姿ではありません。

宗久はしばらくとどまって、この人たちの様子を見ることにしました。彼は山中見まわりの時、十根川神社の境内に杉を植えました。この杉は今日まで生きていて、日本一の巨大杉になっています。

宗久の陣所には、平家の残党の家から、鶴富という娘が

【十根川神社】（椎葉村十根川）
この話に出てくる神社で、宗久が植えたとして有名な巨大杉は八村杉と呼ばれている。

注① 壇ノ浦の合戦・・・平安時代の末期に栄華を誇った平家が滅亡した最後の戦いである。壇ノ浦は山口県下関市に位置している。

注② 鞍岡・・・現在の五ケ瀬町鞍岡。

注③ 陣所・・・一般には合戦時に軍兵が臨時に滞在する営舎のこと。陣屋ともいう。

注④ 下野の国・・・現在の栃木県。

家事をするために呼ばれていました。気だてがよく身のまわりの世話がいきとどくので、宗久はこの女性を深く愛するようになりました。

三年が経ちました。鎌倉幕府から、

「早く帰れ」

という命令がとどきました。宗久は鶴富に対して、

「生まれてくる子どもが、男児であれば我が本国、下野の国[注④]までつれ上るべし。女児なればそなたに残す」

と言って、親子の証拠に一振りの刀を与えて椎葉を立ち去りました。生まれた子どもは女児でしたので、後に養子を迎え、家は代々那須姓を名乗ったと伝えられています。

壇ノ浦の合戦は、およそ八百三十年も昔のことです。しかし、椎葉山のことは、「ひえつき節」に歌われ、全国に知られるようになりました。

一ツ葉浜の観音様

現在の宮崎港は、一ツ葉浜の大きな入江を利用して造られた港です。この入江は、川口から海へと続いていて、ボラ、スズキ、チヌなどや、しじみ貝がよくとれる漁場でした。

昔、近くの村に若い漁師がいて、入り江で毎朝漁をして暮らしていました。

ある朝、いつもの通り、漁に出て網を投げましたが、少しも獲物がとれません。場所を変えては何度も網を投げましたが、なぜか獲物は全くとれないのです。

若者は仕方なく漁をあきらめ、網をかついで帰りかけました。

すると向こうの方から、見なれない若い娘が、たくさんの川魚を入れたかごを抱えて通りかかりました。漁師は、すっかり見とれてしまい、思わず、

「お前さん、見なれない人だが、とてもきれいな人だ。私の嫁になってもらえないか」

と言ってしまいました。

すると娘は、

「私を嫁にほしければ、観音経を読んでそらんじなさい。注① そして明日の朝早く入り江に来て網を入れなさい」

と言い残して何処かへ立ち去りました。

若い漁師は、娘に言われた通り、一晩中観音経を熱心に読んでそらんじました。そして翌朝早く一ツ葉浜の入り江に来て網を投げました。しかし、何度網を投げても獲物は一つも入りません。

漁師は、（おれはあの娘にだまされたのか）と思いながら、もう一度だけと思って網を投げました。

すると、ずっしりと重い手ごたえがあって、何か大きな物が入っているようでした。漁師が、そろそろと網を引き上げると、何か金色のかたまりが見えました。手に取って見ると黄金づくりの観音様でした。漁師は驚きましたが、あまりにも立派な観音様なので、これは村の正光寺に寄進してお堂に置いてもらおうと思いました。

正光寺の門の前まで来ると、昨日入り江で出会った娘にそっくりの娘が立っていました。

娘は漁師に向かって言いました。

「私は豊後の国から来た者です。注③ いつも信心している観音様のお告げがあって、日向の国にいる四十右衛門という人の嫁

【正光寺】（宮崎市浮ノ城）

注① そらんじる・・・暗記する。おぼえる。

注② 寄進する・・・寺や神社などに土地や金銭、財物を寄付すること。

注③ 豊後の国・・・現在の大分県のうち宇佐市と中津市を除いた大部分に当たる。

になれと言われて、ここに来ました」

漁師は、四十右衛門というのは自分のことなので、びっくりしました。しかし、観音様のお告げというので、さてこそ、今朝の観音様かと思い、二人は夫婦になりました。注④

この娘が嫁に来てからというもの、漁師の網には毎日たくさんの獲物がとれました。嫁も働き者で、とれた魚を町に持って行ってよく売りました。夫婦の家は次第に豊かになり、長く幸せに暮らしました。

宮崎市吉村町浮之城というところに、正光寺というお寺があります。この寺は、景清が建てたとも伝えられています。注⑤

現在では、お寺の本堂は無くなり、観音堂だけが立っています。

注④　さてこそ・・・そうしてはじめて

注⑤　景清・・・平景清のこと。本書の三十七～三十八ページの話に登場。

赤江浜の大蜘蛛

大淀川の河口付近の海岸は、赤江浜と呼ばれています。昔は海岸一帯が広大な松林に覆われていて、昼でも暗いほどでした。松林の中央付近にひときわ巨大な松の木があって、遠くからでもよく見えていました。

赤江の人々は、ここの浜で漁をしたり、松林の枯れ枝を集めたり、春や秋には茸を採ったりして暮らしていました。

いつのころからか巨大松に一匹の蜘蛛が住み着いて、人々の知らない間にどんどん大きくなり、恐ろしい大蜘蛛になっていました。

この蜘蛛の足の長さは三間（約五メートル）、目玉は一斗樽（十八リットル入りの容器）注①ほどもありました。大蜘蛛は、昼間はじっと木の上にひそんでいますが、夕方から夜になると下りてきて、何も知らずに通りかかる女、子どもを襲いました。

人々は恐ろしくて浜に行けなくなり、何とかしてこの大蜘蛛を退治したいと思っていました。何人かの腕自慢の男たちが大蜘蛛退治に向かいましたが、みんな蜘蛛に食われて帰ってきた者はおりませんでした。

ある時、剣術の達人という武士がやって来ました。彼は村人に頼まれて危険な大蜘蛛退治を引き受けました。武士は、村人から大蜘蛛のことをいろいろと聞き、自分なりに戦い方を工夫しているようでした。

武士は何か決心がついたらしく、大蜘蛛が木から下りてくるところを見計って、松林に出かけて行きました。武士と大蜘蛛は激しく戦うことになりました。蜘蛛は口から粘っこい糸をはきだして、長い足で武士をからめとろうとし、武士は糸をかいくぐって刀を取られまいとする戦いが続きました。

そのうち、蜘蛛は吐き出した糸を武士にからめ、口元にたぐり寄せようとしました。

武士はこの時とばかり大蜘蛛の胸元にとびこんで、刀の柄も通れとばかりに蜘蛛の腹を突き刺しました。さすがの大蜘蛛も腹を刺され、大量の黒い血を出してそのまま死んでしまいました。蜘蛛の血はどくどくと流れ出て松林いっぱいに溢れ、松の木の幹を黒く染めました。

赤江浜の松の木が今でも黒いのは、この血のためであると言い伝えています。

【八手神社】（宮崎市田吉）
シオツチノ神（本書「海幸彦と山幸彦」に登場）を祀っている。

注① 一斗樽・・・直径四十センチメートル ×高さ三十五センチメートルが一般的なサイズ。

ところで、大蜘蛛を退治してもらった村人は、大変喜んで武士にお礼をしましたが、怪物の蜘蛛の祟りを恐れました。それで、巨大松の根元に蜘蛛の霊をなぐさめる石碑を立てて祀りました。

後にこの石碑は、松林に近い八手神社の境内に移され、「いしぼし様」と呼ばれています。

焼畑と蛇神様

日之影町の宮水と大人という集落を結んで、竜天橋という橋があります。五ケ瀬川の峡谷を見おろす眺めのよい橋です。この峡谷のあたりに大きな淵(注①)があって人々は逆巻の淵と呼んでいました。

昔、逆巻の淵にかかる山の斜面を、近くの村に住む男がヤボ切り(注②)をはじめました。

この山の斜面には一本の大きな木があり、その根元には洞穴があって大蛇の夫婦が住んでいました。男は、この大きな木の枝から切り落とそうと、木に登って枝を打ち落とし始めました。大蛇は、木を揺り動かして男を振り落とそうとしましたが、山仕事に慣れた男が歌う仕事歌に聞きほれて、落とすことができませんでした。

やがてヤボ切りが終わり、切り払った草木も枯れて火を入れる時が近くなってきました。雄蛇はだんだん心配になってきました。雌蛇がお産をする時期が近くなっていたからです。

ある晩、ヤボ切りをした男の枕辺に立って、

「火を入れるのを七日間待ってくれ、この願いを聞いてくれれば、お前の家に幸福をもたらしてやる」

と頼みました。

男は、夢を信じませんでした。焼畑は時期に合わせて種をまかないと、よい収穫ができないからです。七日間も延ばすことは考えられませんでした。

いよいよ火を入れて焼く日がきました。雄蛇はこの日、お産をする雌蛇のために二上山(注④)という遠方の山に薬を求めに出かけていました。急いで帰る途中で、逆巻淵の方に煙が見えました。大急ぎで帰ってみると、すでに山の斜面は焼き終わって一面が灰になっていました。雄蛇は、煙がおさまるのを待って、洞穴に行って見ました。すると、雌蛇と子蛇は無残な姿で焼け死んでいました。雄蛇はこれを見て怒り狂いました。

その夜、雄蛇は男の家に巻きついて、家を倒してしまいました。その後も男の家だけでなく、村では火事にあう災難が生じたり、火傷をする人が出たりするようになりました。男は、夢に現れた蛇のことを思い出し、大蛇の恨みかも知れないと後悔しました。

それで村人と相談して逆巻淵の山に小さな祠を立て、焼け

死んだ蛇の親子の霊を手厚く慰さめました。村人も大蛇の霊に祈りを捧げるようになりました。村の災難は、それ以後起こらなくなりました。

焼畑や野焼きは、昔は各地の村で行っていました。蛇が焼け死ぬこともあったと思われます。蛇の祟りを慰めるために、蛇神様を祀った話は、いくつも伝えられています。

【逆巻の淵】（日之影町宮水）
この話の舞台となった場所。

注① 淵・・・底が深く、水が流れずにたまっている場所。

注② ヤボ切り・・・山の斜面の木や草を切り払って乾燥させ、ころ合いを見て焼畑にすること。

注③ 焼畑・・・山林・原野を伐採してから火をつけて焼き、その灰を肥料として作物を栽培する方法。

注④ 二上山・・・高千穂町と五ケ瀬町にまたがる山。標高千八十二メートル。

椀貸し淵

五ケ瀬町を流れる三ケ所川の上流に、穿げの淵というところがあります。

「穿げ」というのは、穿がつ[注①]という言葉からおこった呼び名です。川の流れをさえぎる岩があると、水流が岩の下に穴をあけて通って行くところができます。そこが穿げです。

穿げの淵は、昔から竜の住むところと考えられ、人々はここに穿げ明神という水神様を祀っていました。穿げ明神は変わった神様で、村の祭りや、祝儀などで、お椀がたくさん要る時には、前の晩にここへ来て、

「膳・椀貸し給え」

とお願いして祈ることになっていました。翌朝ここに来ると、お願いしただけの膳と椀が揃えて出してあるのです。人々は「椀貸し水神」として大切に祀っていました。

ある時、村の男が祝儀のために、この神様から椀を借りました。祝儀が終わって椀を返しに行こうとすると、どうしたわけか椀が一つだけ足りなくなっていました。

仕方がないので、男は色形の似た椀を見つけてきて紛れ込ませ、知らぬ顔をして水神様に返して置きました。

これが禍して、それから後は、村人が何度お願いしても、椀を借りることはできなくなってしまいました。水神様は怒ってしまったのです。

また、諸塚村に「小払いとどろ」[注②]というところがあります。昔、ここは川岸まで樹木が生い茂り、昼でも暗いところでした。しかし、村人は催しごとで膳や椀が要る時には、ここに来て、

「お頼み申そう。膳・椀をお頼み申そう」

と頼んでいました。

「お頼み申そう」

と言うと、深い淵の中から白い美しい手が出て、膳と椀を必要なだけ出してくれるのでした。

用が済んで返しに行った時も、お礼を言うと白い美しい手が出て、膳・椀を受け取るのでした。

村人は、淵の主はきっと美しいお姫様であろうと噂していました。

ある時、膳・椀を返しに行く役目に二人の若者が当てられ

【穿げの水神】（五ケ瀬町）

注① 穿がつ・・・穴をあけること。

注② 小払いとどろ・・・現在の諸塚村大字家代小払付近。

ました。若者はいたずら心を起こし、あの美しいお姫様の手が出たら、つかんで引き上げてみようと相談しました。

二人は淵に来て、

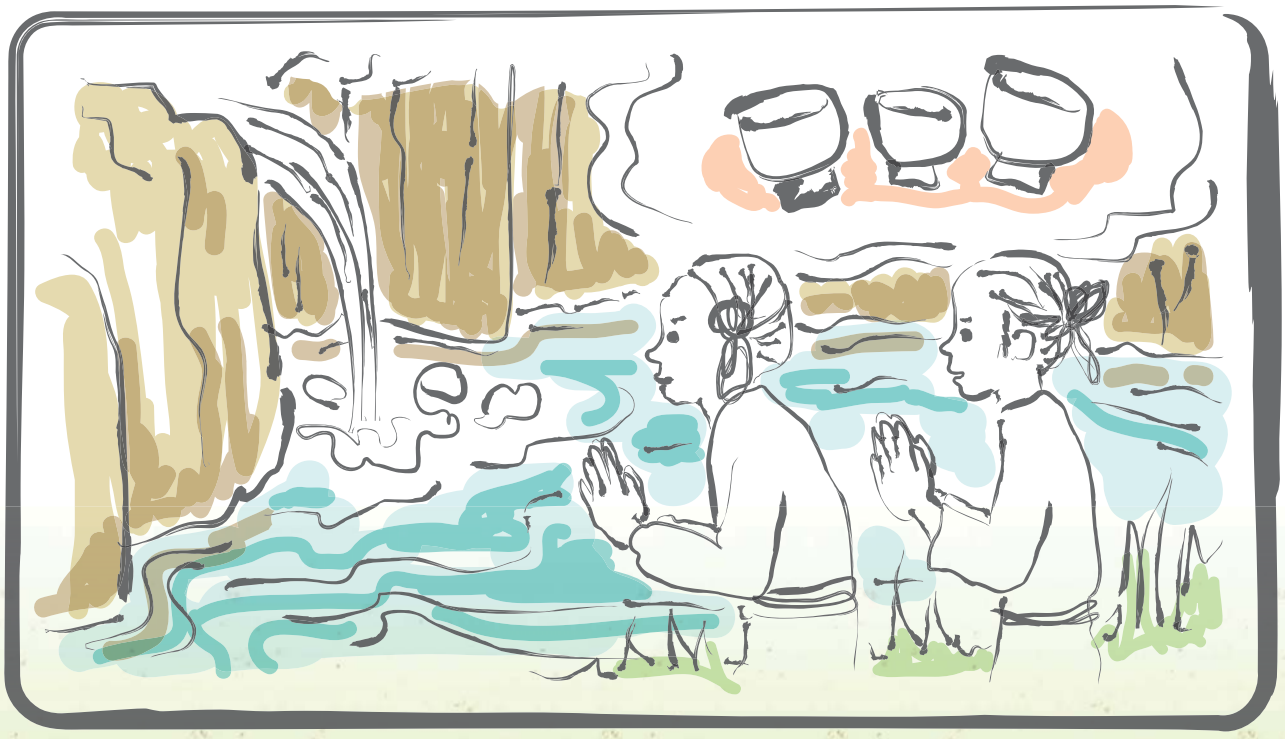
「お返し申す」

と言いました。すると美しい手が出てきましたので、すばやくつかんで引き上げようとしました。

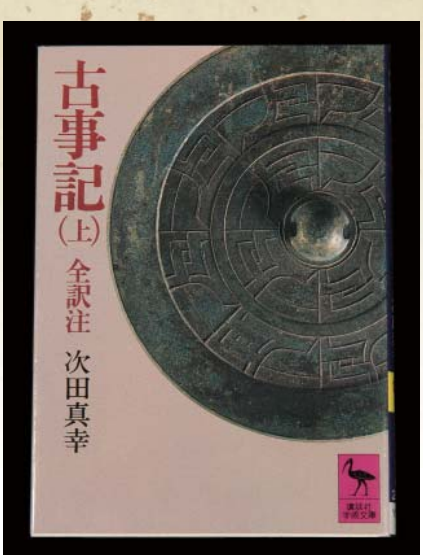
しかし、白く美しい手の力はとても強く、二人の若者は淵の底に引きこまれてしまい、二度と上がって来ませんでした。それ以後、もう膳も椀も貸してもらえなくなりました。

若者は、後にこの淵に住む二匹の河童になったと伝えられています。

このような椀貸し淵の伝説は各地に伝わっています。昔の人が、水神祭りをした時に、お供えにしたものを水に流していたので、このような伝説が生まれたのではないかといわれています。椀貸し淵伝説は中部地方に特に多いということです。



神話・伝承編　関連図書



『古事記　全訳注（上・中・下　三巻）』
次田真幸／著
講談社学術文庫

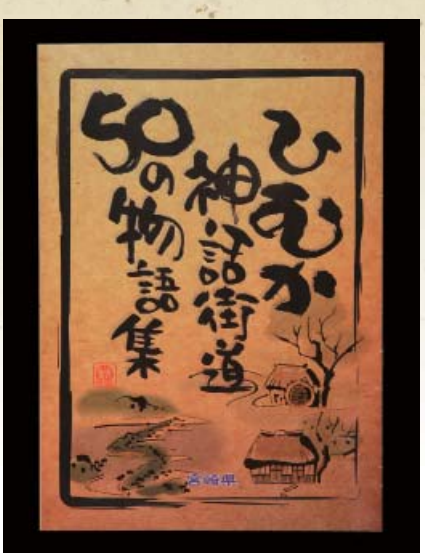
『日本の神話と十大昔話』
楠山正雄／著
講談社学術文庫

『日本の伝説』
柳田国男／著
新潮文庫

『日本の「神話」と「古代史」がよくわかる本』
島崎晋／監修
日本博学倶楽部／編
PHP 文庫

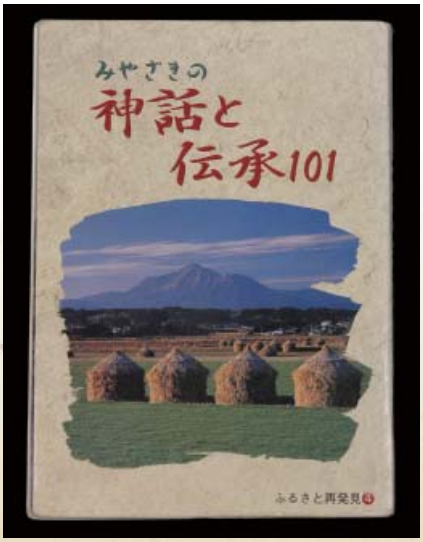
『宮崎の神話伝承　その舞台 55 ガイド』
甲斐亮典／著
鉱脈社

『七五調四行詩と絵で語る
古事記　神々の詩』
湯川英男／著　田畑吉親／絵
鉱脈社



『ひむか神話街道　50 の物語集』
宮崎県／編

『日本の神話（全六巻）』
舟崎克彦／文　赤羽末吉／絵
あかね書房



『みやざきの神話と伝承 101』
宮崎県／編
宮崎日日新聞社

『決定版　心をそだてる
松谷みよ子の日本の神話』
松谷みよ子／著
講談社